

＜書 評＞

W. マルクワルト 著

加倉井周一（東京都補装具研究所）訳

靴型装具のすべて 理論と実際

澤村誠志（兵庫県リハビリテーションセンター）

欧米の整形外科の workshop を訪れる度に、おびたしい靴の木型の存在に目をみはった方は、きわめて多いはずである。数年前に西独 Gettingen の靴製作者で採型より製作までの過程をみ、この 9 月にオスローの義肢装具学校の靴型装具のコースを訪れた。いずれも 19 世紀後半より長年の歴史に支えられた靴型装具の処方 の 深 さ、西独での Orthopädie-Schuhmachermeister の定期的刊行、さらにその職業としての専門性とプライドに改めて驚くと同時に、わが国でのこの分野での遅れを痛感してきた。

日本でのこの靴型装具の分野でおくれをとった原因は、室内で靴をはかぬ生活習慣、整形外科医の無関心さ、整形外科靴の厚生省基準価格が著しく低価格に押さえられてきたなどであろう。しかし、何よりもこの靴型装具に関する本格的なテキストと呼ばれるものが皆無に近かったためであろう。この意味で、今回本書が加倉井博士により紹介されることになった意義はきわめて大きいと思

われる。

本書は Stuttgart 市聖パウロ整形外科病院長 Marquardt 博士による Wittenberg および Stuttgart 教室での靴型装具の経験を元に整形外科矯正靴製作審議会が設けられ、医師および靴製作技術者協会からの委員により西独全域からの情報と経験をもとにして博士がまとめられたものである。靴型装具の歴史より、人体の生物学的な基礎を歩行、骨格、筋肉、神経、皮膚、血管などが多くの図とともに分り易く紹介されている。ついで神経疾患、循環障害、炎症、内反足など先天性足部の変形など、足部の疾患が豊富な写真とともに示されている。ついで靴型装具については、まず整形外科矯正靴の役割り、可能性、適応、処方の方針について、ついで足底板の採型手技、材料についてのべられている。大量生産靴については、踵、足底部などに対する補正がくわしくのべられている。最近わが国でも、とくに RA、OA などに対する既製靴への補正が装具製作者の手によりなされる機会

が多くなっているが、ヒールのクッション、靴底のロッカーバー、中底のパッドなど有益な指針がこの中に多くのべられている。さらに足部変形の基本形態にふれ、尖足、踵凹足、踵足、扁平足、内反足に対する靴型装具、脚長差に対する補高用靴型装具、さらに足根部切断に対する靴型装具の適合理論、採型方法などがのべられているのは興味深い。

本書の全般を通じて、豊富な写真とイラストにより靴型装具の処方、理論が具体的にのべられているので、きわめて有益なテキストとなっている。

さらに巻尾に、加倉井博士が靴、靴型装具についての種類、各部の名称、形式、基本構造などについてふれ、また対応外国語一覧表を附記されているのも読者にとって、きわめて親切である。本書を記されるについては、われわれの日常なじみの少ない言葉が多かっただけに大変な御苦労があった事と思われ、ここに改めて加倉井周一博士の御努力に深甚の敬意を表したい。それとともに、本書は商業出版の立場からは賛意を得られなかったときくが、業界の発展のために先見の明と勇気をもって出版されたパシフィックサプライ川村一郎氏に深く御礼申し上げたい。

（A 4，頁 176，¥9,800，パシフィックサプライ株式会社 刊）